

中尾世治、杉下かおり（編著）『生き方としてのフィールドワーク——かくも面倒で面白い文化人類学の世界』

■出版地：神奈川 ■出版社：東海大学出版部 ■出版年：2020年 ■総頁数：333頁 ■定価：2,800円＋税

藤川 美代子*

本書は、2020年3月に南山大学人文学部を退職された坂井信三先生の業績を記念し刊行された。大学院のゼミで坂井先生から教えを受けて主として研究職へと進んだ教え子10名の文章から構成される。人類学に限らずフィールドワークの心構えや技術を伝えようとする入門書や概説書は枚挙にいとまがないが、本書はそれらとはやや異なり、「フィールドワークという、人類学的実践の核心をなす営みを通して、この学問分野の厄介な面白さを初学者に伝えることを目的」とし、かつ「職業的な人類学者に対して、それぞれの人生とフィールドワークを真摯に見つめ直すことを促す試み」として編まれている（p.2）。まずは、序論と三部十章から構成される目次にしたがって各章の内容を紹介することにしよう。

「序論——生き方としてのフィールドワーク」（中尾世治、杉下かおり）では、ここ30年余の間に、フィールドワークが学問の枠組みを超越しながらアートやビジネス、科学（技術）コミュニケーションの場へと（理念的には際限なく）拡張した結果、研究者か否かにかかわらず当事者を含む多様な担い手にとって「生きることとフィールドワークすることは、ほぼ同義」（p.11）との状況が生まれたことが確認される。こうしてフィールドワークが多様化するなかにあって、人類学者はなおも、長期のフィールドワークを研究者としてのアイデンティティを構成する要件のひとつに据え、いわばフィールドワークに「取り憑かれ」（p.12）つづけてきたかに見えるのだが、本書はまさにそうした「フィールドワークのある人生」（p.12）に焦点を当てるものである。本書のタイトルでもある「生き方としてのフィールドワーク」という問題設定は、「学

問を『わがこと』として捉えるという視角」（p.13）を内包しており、各執筆者が自らの生と学問（時にそれは弁別不可能となる）を顧みる試みともなる。

第一部「はざま」は、ホームとフィールド、文化と文化、人と人の狭間にある「生き方」としてのフィールドワークに迫る。第一章「フィールドを選ぶ／フィールドに選ばれる——エチオピアのイスラーム聖者村と人類学者」（吉田早悠里）は、エチオピア研究者の教員に誘われるがまま小旅行のような気分で訪れた調査対象外のトリ村（イスラーム聖者の故アルファキーとその息子アブドゥルカリムを慕う人々により構成される村）で、短期の訪問者から「外国人委員会」代表者へ、さらに調査者へと立場を変えながら、村落生活を構成するアクターとして巻き込まれていく過程を描く。別の村で調査と研究をつづけながら、その間も吉田は不思議な力に引き寄せられるように継続的にトリ村を訪れる。調査地にする決断もつかぬままトリ村へ通う吉田はやがて、当地の言葉も解さず、たった一人の外国人であるにもかかわらず、外国人委員会を組織せよというアブドゥルカリムによる命を受けて村の出来事にしごく受動的な形で関与することになる。初訪問から10年目（！）、吉田はついに自らの意志で世帯調査に着手し、自分こそはアルファキーがかつて村への到来を予言した「外国人」であると意識し始める。「フィールドに選ばれた」としか表現しえぬトリ村との出会いは、職を得た日本との往來を重ねるうちにトリ村こそがホームなのではないかとの思いを吉田に抱かせる。それは同時に、人類学者である自らの存在や実践がフィールドの現実世界にいかなる影響を及ぼすのかを、外部から客体化して見つめ

* 南山大学

る姿勢を可能にしてもくれた。問いやテーマを引っ提げ「フィールドを選ぶ」ことにも「フィールドに選ばれる」との側面がつきまとうものだが、ひとまずフィールドに身を置いてみるからこそが人類学にとって重要な鍵を握るという好例である。

第二章「文化の狭間に生きる——トランスポーター、ジョセフの生き方」(川崎一平)では、人類学者を対象社会についての理路整然とした説明を提供してくれる知識人やリーダーといったインフォーマントとは異なり、声がすくい上げられる機会の少ない人の生き方に焦点を当てる。主人公はパプアニューギニアのセピック川流域でガイドとして生計を立てるジョセフである。ジョセフは出身村を離れて他の町や村を転々とし、他の民族集団の女性と結婚し、外国から来る観光客をカヌーに乗せて川を移動するという意味で複数の文化の狭間に生きる「文化のトランスフォーマー」(p.74)であり、川崎は出会ったばかりの頃のジョセフに対する苛立ちや、調査村で起きた出来事についてのジョセフなりの解釈から、調査村に埋没することだけでは得られぬさまざまな気づきを得る。そのうち、川崎はひょんなことからジョセフのガイド助手となりバックパッカーにセピック文化を紹介して「まるで人類学者のようだ」と言わしめ、片やジョセフはその横で村人の話を聞きメモや写真をとるなど、両者の役割が入れ替わるかのような経験もする。ジョセフのガイドの仕事はやがて大規模な詐欺事件へと発展し、ジョセフの逮捕と第二のジョセフの出現という衝撃の結末を迎える……。これらの断片的な出来事は、川崎の著す民族誌や論文では物語化されず、ジョセフ自身にとっても些細なものでしかないようなのだが、フィールドワークとは多様な他者との実に関係性の中で、既知の世界や価値観を刷新する営みであることを教えてくれる。

第三章「生きるように学問する——私が南アフリカまで日本人に会いに行く理由」(杉下かおり)は、人類学とは「人間の普遍性を問題化できる地平を切り拓いていくこと」(p.93)という坂井先生の言葉に導かれるように調査へ出かけたザンビアや南アフリカで、人間の不平等性という理不尽な真実を前にして、人間を語ることはおろか調査をつづけることにも希望を失い「人類学者として一度死んだ」(p.95)杉下が、「日本人アフリカニスト人類学者」(p.107)として再び歩み始める過程を描く。杉下は日本の近代史と日本における人類学の発展について学ぶなかで、学問的主体と

しての自己を「普遍的人間」代表たる白人男性と同一視してきたそれまでの自分を否定し、「日本人」であることの歴史的責任に人類学者として向き合う必要性に気づく。この気づきは、白人支配下の南アフリカと日本の関係をたどることで「日本人の人種意識」を追究するという課題として結実し、杉下は「南アフリカ白人」(p.106)の男性との間に生まれた娘の母としてこの課題に人生を捧げる覚悟を決める。人類学者としての杉下の物語は、フィールドで対峙する人々を学問のために食い物にしたことに対する懺悔と、無様な「私」を語り、「その実存ごと、その社会的背景ごと、『彼ら』に差し出し、交感する」(pp.112-113)ことこそがその悔いを洗い流してくれるという希望とともにある。

第二部「おわりとはじまり」は、各世代の人類学者がフィールドワークをふり返ることで過去・現在・未来をつなぐ新たな意味を発見する。第四章「失われた時を求めて——フィールドワークにおける老いと時間」(菅沼文乃)は、博士論文・著書の執筆に専念するために沖縄県那覇市辻のフィールドと距離をとっていた菅沼が、4年のブランクを経て当地を再訪した際の体験をとおして、老いの研究を行うおこなう自身に4年という時間がもたらしたものを考察する。菅沼にとって「やや寂れてはいるものの旧遊郭としての自負を残す歓楽街」(p.126)だったはずの辻の町並みは、中国語を話す家族連れの観光客であふれ、全国展開のスーパーマーケットが開店し、料亭の跡地には大型の入所型高齢者福祉施設が建ち、すっかり変化している。フィールドとした「憩いの家」で見覚えのない職員に不思議そうな顔をされたり、かつて菅沼に世話を焼いてくれたスナックのママンさんに認知症状が出ていることを聞かされたりしながら、菅沼は4年という月日の重みを実感する。だが、より印象的だったのは、これらの変化を前に浮かび上がる『私は本当にフィールドに戻ってこられたのか』という疑い(p.135)であるという。菅沼はこれを、眼前のフィールドを4年前のフィールドの延長として認識することで生じた疑い・違和感であると考え、この経験を辻の新たな側面を見つけ直す、いわば「フィールドとの再会」として捉えることを試みる。だが、再会は叶うとは限らない。事あるごとに菅沼に声をかけてくれた元自治会長は4年後、菅沼を別人と認識していた。「あの子はもっと若くて、スリム」だったからだ……。自らのライフステージを踏むなかで、フィールドとの一

定期間の離別を経験する研究者は少なくない。フィールドとの再会、再会の失敗、そして出会い直しとは、菅沼に限らずすべての研究者が真摯に向き合うべき事象といえるだろう。

第五章「フィールドワークと「甘え」——フィジーの自殺研究を振り返って」（杉尾浩規）では、自殺研究にけりをつけた杉尾が、順調とはいえぬ調査の最中に自身が感じていた「不思議な感覚」（p. 147）の正体に迫る。「楽園のイメージが強いフィジーで自殺のリスクが高いのはなぜか」というごく素朴な疑問から始まったフィールドワークは、フィジー警察の犯罪統計局と中央本部戦略企画室を拠点に、それらの場所に保管された日報と自殺レジスターを含む警察資料を対象として進められた。机をもらって毎日定時に出勤し、署内で良好な人間関係を築きながら、フィジー全土の警察署訪問へと調査の範囲を拡大するうちに、杉尾はフィジーの自殺予防策立案の根拠であるはずの犯罪統計室の数値が各警察署の情報を反映していないことに気づく。この「分からなさ」に満ちた現実の下で場当たりに自殺情報の流れを追うしかない、というもどかしさとは裏腹に、杉尾は「どうにかなるな」という不思議な感覚を抱いていた。杉尾はその不思議な感覚の正体について、土居健郎の「甘え」論に依拠しながら「見守られて甘えることがもたらした安心感」（p. 164）であったと結論する。だが、安心感の出所は単純ではない。現場での良好な人間関係は、実際には打算的な「狎れ合い」と紙一重で順調な調査の遂行を意味しなかったからだ。反対に杉尾に安心感をもたらしてくれたのは、ただの知り合いに過ぎなかったタクシー運転手とその妻であり、杉尾は彼らの子どもとして受け入れてもらうことで、その属性こそが「安心できる自分の居場所」（p. 167）になっていたことに気づく。杉尾のこの気づきは、別の研究の開始を契機としたものであり、視覚を不断に更新することこそが、渦中にいた時は気づかなかった複数の事柄に新たな意味を与えてくれることを示すよい例である。

第六章「『生活実感』からの再出発——モロッコのベルベル人男性ハーッジとの出会いと歌舞アホワシ」（齋藤剛）は、モロッコでのフィールドワークで出会ったハーッジという男性が生涯を通じて大切にしていた歌舞アホワシの魅力を描く。齋藤は、研究者個人の内発的な問題関心、あるいは先行研究の蓄積に規定されるテーマ先行型の研究が、往々にして現地で出会った人を「『研究のための研究』に閉じ込め

（p. 178）てしまうことに自覚的であるべきではないかと問いかける。齋藤は太鼓の名手でもあったハーッジに何度か、アホワシの太鼓の演奏をここで聞いてみたいとか、小太鼓の打ち方を教えてほしいと懇願するが、本当に演奏している場でしか教えられないと素っ気なく断られる。齋藤は、現地の人々の「生活実感」（p. 176）を大切にし、「住民の声」（p. 177）に耳を傾けるということこそが「『研究のための研究』という殻を破る」（p. 178）ための一歩と考え、その好例としてハーッジとアホワシに注目したはずだった。だからこそ、アホワシが好きなのにそれを語ろうとしないハーッジの態度に、齋藤は戸惑う。だが、後に亡くなったハーッジの娘の、「（齋藤が）アホワシ（常軌を逸したようにアホワシを愛する人）でないので、（父が）教えたとしても伝わらないから何も教えなかった」という言葉に、齋藤は自身がアホワシを楽しみ尽くそうとする姿勢を欠き、依然として自身の問題関心からハーッジに問いを発するという研究者然とした態度から脱け出せていなかったことに思い至る。このエピソードは、フィールドワークにおいて調査者が自らの必要とする情報を体系的に語ってくれる人を探すのと同じように、語ってくれる相手もまた、眼前の調査者が自らの語るに足る相手なのかを見極めている、という大切な点を気づかせてくれる。

第七章「楽園の宗教と観光と私をつないだ食堂——バリ島の忘れえぬ恩人たちとの出会い」（吉田竹也）もまた、先行研究に規定され凝り固まった自身のまなざしを自覚し、転換する契機となった出来事に焦点を当て、それを「忘れえぬ恩人」との出会いとして振り返る。「儀礼をとおしてインドネシア・バリ人の宗教実践の総体を記述し、（司祭・旧王族層のものではなく）一般のヒンドゥー教徒の価値観に即して解明する」とのテーマを携えてウブドに長期滞在した吉田は、ひとつの儀礼でも複雑で複合的な過程が数日間にわたりつづくという現実に圧倒され、フィールドワークの挫折を感じて日本へ帰国する。吉田は研究上の挫折を、家族の死や誕生、自身の結婚・就職といった人生の重大局面とともに経験するが、挫折を乗り越えるきっかけをくれたのは、バリ島の観光地ウブドで行きつけにしていた竹屋食堂での女性従業員との何気ない会話だった。彼女の実践する唯一神への個人的な祈りは、吉田を「多神教としての伝統的なバリ宗教」との固定観念から解き放ち、インドネシアという国家に埋

め込まれたバリで同時代的に実践される祈りのもつ意味へと引きつけることになった。この関心は吉田が後に取り組み観光研究の文脈においても、観光地ウブド周辺で展開する華やかな儀礼に込められた弱き人々の思いを見出すことを可能にし、吉田を「楽園」の抱える暗部という新たな研究テーマへと誘った。自身の研究人生の転機をふり返り、吉田は別のことにも思い至る。それは、転機は「調査」ではなく「休息」の時に訪れる、というシンプルな事実である。フィールドにおいてはオンもオフも地続きのものとして存するとの吉田の気づきは、多くの研究者が漠として感じていることがうまく言語化されたものといえるだろう。

第三部「身のまわりから」は、人類学者の日常生活にフィールドワークの契機が埋め込まれていることを考える論考で構成される。第八章「異文化表象の誤記と交響するフィールド」(菊地滋夫)は、大学教育における菊地の挫折とそこからの起死回生を描くことで、「フィールド」と「フィールドではない場所」の境界が予期せぬ形で瓦解し、タンザニアのザンジバルという遠く離れたフィールドがアフリカと接点のなかった日本の学生の間へと広がっていく過程を明らかにする。ケニア・カウマ社会のフィールドワークに基づく妖術や憑依霊を研究していた菊地の私立大学教員生活は、2000年代の大学全入時代の幕開けと共に挫折する。異文化理解の講義に対する学生たちの鋭い反応は鳴りを潜め、私語・居眠り・教室内の立ち歩き(!)が横行したからだ。打開策として、菊地は「現地の文化に触れることで、アフリカに対するステレオタイプを打ち破り、自らの世界観を再想像／再創造する」とのモットーを掲げてザンジバルでのフィールドワーク実施を試み、やがてこれは最多参加者を誇る人気の授業となる。現地で学生が行なうのはおしゃべりに過ぎないのだが、バラザと呼ばれるスペースで初対面の人と互いの家族・仕事・将来の夢についておしゃべりを楽しむ学生たちは、自身がいつの間にか日本で自分をがんじがらめにしていた「心の壁」(p. 248)を乗り越えていることに気づき、驚きと喜びを感じるようになった。そこにあるのは、日本の学生がザンビアの若者の積極的なコミュニケーションや人生に対する前向きな姿勢に圧倒され、自身を省みるという菊地自身も予期しなかった状況であり、菊地はこれを単純なオリエンタリズム批判が想定していた異文化表象とは異なるものが「誤配」(p. 252)された結果として捉える。菊地はこれに着想を得て「大学のバラザ化」を目

指し、入学直後の全学部学科横断型アクティブラーニングを実現させる。フィールドはそこだけで完結するのではなく、教員や学生を巻き込みながら互いに交響するのである。

第九章「異分野との共同研究の現場——現場＝フィールドの学としての人類学」(中尾世治)は、中尾が勤務先の総合地球環境学研究所で自然科学・人文科学・社会科学をまたぐ共同研究「サンテーションプロジェクト」に「ブルキナファソの文化や社会に詳しい人類学者」として参入していく過程をオートエスノグラフィーの手法で描く試みであり、そこから学際的な共同研究における人類学的視点と、職場を人類学することの可能性を見出そうとする。生活の一部であるはずのものを「トイレ・排泄の文化」としてまとめること、文化・宗教・社会の専門家として意見すること、開発援助プロジェクトそのものへのコミットといった自らに求められていそうな事柄のどれにも違和感や不安を抱きつつ、中尾は衛生工学やサンテーションの専門用語や研究会の場に「馴染み」(p. 281)ながら、ブルキナファソのし尿汲み取り業者の調査を開始し、そこに研究成果の萌芽を見出して安堵する。だが、その矢先に環境工学専門家からかけられた言葉に、中尾は自身が異文化としての工学に文化相対主義的な態度を適用していたことに思い至る。対象の理解が対象への「同化」(p. 287)を招くという人類学のフィールドワークにありがちな陥穽を省みながら、中尾はこのプロジェクト自体、すなわち自身の仕事をフィールドワークの現場として対象化し、分析する試みへとたどり着く(その結果がこの第九章である)。同時に、中尾は歴史研究者としては文書内／間の引用・言及関係や論理を読み解こうとし、反対にプロジェクト内での報告書作成時は文書内／間に整合性をつけるという対照的な作業をしていることに気づいて驚く。中尾は最終的に、共同研究を文書作成の現場と捉えることで、書かれたものを扱う歴史学に対比されるところの、ものが書かれる現場を扱う人類学の研究としても昇華させられるという新たな発見に至るのである。

第十章「そんなことはどうでもいい、というわけでもないのかもしれない」(山崎剛)は、この本の読者とともに、本を読みながら、本を読んでいることをフィールドワークするという試みである。山崎は問う。本を読むという行為は、本の内容を理解することなのか、と。本を読む時にあなたがしていること、す

なわち書店で買うかどうかを悩みながらスリップ（本に挟まれた売上／注文カード）や客を気にしたり、横になりながらベッドのやわらかさを感じたり、テレビや携帯端末が気になって本を読み始めてもすぐ閉じたり……これらもまた本を読むという行為なのに、どういふわけか「どうでもいいこと」として考察の対象にも、話題にもなることはない。だが、どうでもいいことのように思われる事柄に注意を向けると、急にそれが意義深く楽しいもののように感じられるという現象は、この本の各章が扱うフィールドワークの経験からも明らかだ。フィールドワークも、日々の生活も、人生もどうでもいいことであふれている。それは、「今、まさに起こり、簡単にはまとまりのつかないかたちで展開しているもの」である。注意を向け、気にかけ、大切にすることで、どうでもいいものは、どうでもいいというわけではないものになる（かもしれない）。フィールドワーク、学問、生きることの始まりには本来、そのような態度があるのではないかという山崎の言葉は、「生きることはフィールドワークすること」という本書冒頭で打ち出された視点へと読者を連れ戻す。

この書を読み終えて最初に抱いたのは、南山大学で坂井先生の薫陶を受けて研究者となった教え子の数の多さ、教え子たちの研究地域・テーマのバリエーションの豊かさに対する素直な驚きと、すべての執筆者が見せる「自らが行ってきたフィールドワークと人類学についての、しつこく深い省察」に対する敬服の念である。この（もちろん、よい意味での）しつこさと深さを醸し出すのは、何か。ひとつは、各章で記述されるエピソード自体が単純ではないということだろう。どの章も、フィールドで生じる出来事や自らの処し方のうち、どちらかといえば停滞・挫折・休息・どうでもいいこと・失敗のように見える事柄に焦点を当てている。それらはいずれも、単なるフィールドでの思い出話として済ませるには惜しく、その後数年から数十年にわたってフィールドの再訪をつづけたり、別の研究を進めたり、日常を過ごしたりするなかでくり返し思いを馳せるうちに熟成され、前進・達成・仕事・重要なことへと至る大切な転換点であったのだと気づかされるような事態、あるいはそれらの評価が二転三転するような一筋縄ではいかぬ事態である。それゆえに、いずれの執筆者も、明示はせずとも「研究者自身の問いから始まる」（第一章）、「学問的な仮説を立て」（第二章）た上での「テーマ先行型」（第六章）

の、すなわち「重要なことが何かを最初からわかっていて、重要なことだけが必要なことだと思うのなら、（中略）その人はそのことだけを調べていればいいわけだし、それだけをただ、こなしていればいい」（第十章）というタイプの、用意周到に実施されるフィールドワーク（現実にそのようなフィールドワークは実現可能なかはさておき）からは距離をとり、意図せぬ形での出会い、悩みやもがき、あるいは「誤配」（第八章）の結果として展開することになったフィールドワークや研究の一側面を取り上げている。だからこそ、「スキルとしてコミュニケーション能力を習得し、……どうにか人類学者になった」（第三章）という意識に共鳴する評者にとっても、本書はフィールドワークの魅力を真正面から発信するような入門書・概説書よりも、「かくも面倒で面白い文化人類学の世界」を伝えてくれるものと映った。

しつこさと深さを醸すもうひとつの要素は、「生き方としてのフィールドワーク」という本書のタイトルにふさわしく、すべての章が執筆者自身の「固有な生かない生き方」（第七章）との交差点として、フィールドワークとそれにまつわる苦悩や試行錯誤の営みを据えているという点である。本書の執筆者たちは大学その他の研究機関への就職、結婚・出産・育児、体調不良・老い、家族の誕生・闘病・介護・逝去といった人生の岐路（と考えても差し支えなさそうな段階）や、絶え間なくつづく日常の重なりといったものを意図的に記述しており、このことがフィールドとホーム、仕事と休息、研究することと生きることが反転したり、分ち難く結びついたりすることの意味を際立たせるような効果を生み出しているといえるだろう。

冒頭で紹介したように、この書は人類学の初学者と職業的な人類学者に向けて編まれた書物である。評者の印象では、本書は後者、とりわけ一定期間（おそらく十数年かそれ以上）フィールドワークや研究での挫折や試行錯誤をくり返し、曲がりなりにも人類学らしきことをつづけてきたと感じる（評者を含む）人々に、より強い共感をもって読まれる書物であるように感じられる。第八章で紹介されるスティーブ・ジョブズのスピーチ、「先を見通すなかで、点と点をつなぐことなどできない。それができるのは過去を振り返ったときだけだ」（pp. 237-238）を強く実感しながら、本書の各章で描かれる出来事や事柄をまるでわがことのように読むことができるからだ。だが、ジョブズの

スピーチはこうもつづく。「だから、点と点はあなたたちの未来においてつなぎ合わさるのだということを信じなくてはならない」(p. 238)。これから人類学や

フィールドワークを始めようとする初学者に、この思いは届くだろうか。